

## トランスアトランティック・ヒロイン ——*The Female American* における異種混交性とポリフォニー——

志 渡 岡 理 恵

### 1. 大西洋を結ぶヒロイン

1767年にロンドンで出版された『フィーメール・アメリカン——ウンカ・イライザ・ウインクフィールドの冒険』(*The Female American; or, the Adventures of Unca Eliza Winkfield*, 以下、『フィーメール・アメリカン』と略す)は、タイトルページに“Compiled by Herself”と記されているように、ウンカ・イライザ・ウインクフィールド(以下、ウンカと略す)という女性が自らの冒険を語った回想録という形式をとっている。作者については、偽名であるかどうかを含め、何も分かっていない。出版直後に出た2つの短い書評(*The Monthly Review*と*The Critical Review*にそれぞれ掲載されたもの)にも、作者に関する情報は載せられていない。確かなのは、父親がイングランド人、母親がネイティヴ・アメリカンの混血の女性の冒険談が、アメリカ独立の約10年前にロンドンで出版されたという事実だけである。アメリカ版は、1800年と1814年に出版されている<sup>1</sup>。

この作者不詳の「自己語り」は、帝国主義と密接な関わりを持つ3つの言説の引用の織物ともなっている。3つの言説とは、「ポカホントス神話」(*The Legend of Pocahontas*)、『ロビンソン・クルーソー』(*Robinson Crusoe*, 1719)、「伝道記録」(*Missionary writings*)である。「ポカホントス神話」はウンカの両親の出逢いのエピソードに、『ロビンソン・クルーソー』はウンカの孤島でのエピソードに、「伝道記録」はウンカがネイティヴ・アメリカンを改宗させるエピソードに織り込まれている。ストーリーは、これら3つのエピソードを時間軸に沿って並べるかたちで展開していく。

これらの3つのエピソードが大西洋横断を共通の契機としていることから明らかなように、語り手であるウンカは、トランスアトランティックという概念を象徴するかのような存在である。それは、イングランド人の父親とネイティヴ・アメリカンの母親の間に生まれたという彼女の「起源」によるばかりではない。彼女には、大西洋の両側から継承したのものがあるが、そのうちのひとつ、英国国教会の牧師である伯父から受けた宗教教育を模倣して、ネイティヴ・アメリカンを改宗させる。さらには、彼女を捜しに島へやって来たイングランド人の従兄と結婚し、最終的にイングリ

ドへは戻らず、大西洋上の孤島で暮らすことを選択する。つまりイングランドとアメリカの中間地点に留まるわけである。

このように、複数のレベルでイングランドとアメリカを結ぶ役割を担うウンカは、その特徴である異種混交性を「豊かさ」という肯定的なものとして活かし、主体的な生き方をしているように見える。スカーレット・ボウエン (Scarlet Bowen) が指摘するように、『フィーメール・アメリカン』を『ロビンソン・クルーソー』のフェミニスト的な書き直しと捉える批評家が多いのは、その点を評価してのことだろう<sup>2</sup>。このような研究動向に対し、ボウエンは、この作品の宗教的な側面により注意を向ける必要があると説く。つまり、この作品が、ピューリタンの精神的自叙伝としての、あるいは、宗教的帝国主義の促進力としての『ロビンソン・クルーソー』の書き直しであることを重要視すべきであると主張する。そして、カトリックとプロテスタントの間＝「中道」(“middle way” 189) をゆくと自認する英国国教会の特質を踏まえたうえで、『ロビンソン・クルーソー』と『フィーメール・アメリカン』の比較を行っている。

ボウエンの議論は、『フィーメール・アメリカン』におけるネイティヴ・アメリカンの改宗にまつわるエピソードを当時の宗教的コンテクストに置いて再考した点では高く評価されるべきであるものの、ウンカの行為の非英国国教会的な部分を軽視している傾向がある。何よりも、英国国教会が女性の司祭を初めて認めたのは20世紀の終わり、1994年であるという事実を見落としてはならないだろう。17～18世紀にかけて大西洋を精力的に横断していた女宣教師といえば、クエーカーだった。クエーカーは、すべての人間は平等であるとする立場から、女性が予言や説教を行うことを早くから認めていた。ウンカの「精神的再生」(262) にクエーカーの教義を読み取るマシュー・ライリー (Matthew Reilly) は、初期クエーカーと彼らに影響を与えたアラビア語のテキストとの関係性の中で、この作品を読み解いている。しかし、ウンカの宗教教育を行い、またウンカが師と仰いで模倣するのは、英国国教会の牧師の伯父であることを考えれば、ライリーの解釈にも疑問が残る。

それでは、『フィーメール・アメリカン』の宗教的な側面をとりこぼさずに、この作品の全体像をどのように捉えるのが妥当なのだろうか。本稿は、この問いを出発点に、バフチンのポリフォニーという概念を援用し、『フィーメール・アメリカン』が、複数のレベルで、互いに相反する複数の声を取り入れながら、いずれの言説にも確固たる権威を与えない多声的なテキストであるという解釈を提示する。

## 2. 侵略とロマンス

まずは、『フィーメール・アメリカン』の前半部分、「ポカホントス神話」を髣髴とさせるウンカの両親の愛の物語を見ていこう。ウンカの父親ウィリアム・ウィンクフィールド (William Winkfield) は、実在するジェームズタウン植民者のエドワード・マライア・ウィンクフィールド (Edward Maria Winkfield) の息子で (Reilly 262)、ネイティヴ・アメリカンの襲撃に遭い、囚われの身となる。族長の娘により命を救われたウィリアムは、彼女と結婚、娘ウンカをもうける。嫉妬した義姉アルッカ (Allucca) に妻が殺されると、ウィリアムはウンカを連れてイングランドに帰国するが、再びアメリカに戻り、そこで死去、ウンカは孤児となる。

このウンカの両親の物語は、イングランド人植民者の男性がネイティブ・アメリカンの女性により命を救われるという枠組み以外、「ポカホントス神話」と一致しない部分が多い。「ポカホントス神話」は、侵略と抵抗という衝突の歴史を、センチメンタルな異文化の出会いと調和の神話にすり替え、暴力的なアメリカ侵略を認可しうるものに見せかけるための、イングランドの策略のひとつとも解釈できるが、『フィーメール・アメリカン』には、その主筋からズレる部分が少なくない。そして、「ポカホントス神話」から逸脱している部分では、帝国主義を批判する声が複数とり込まれている。

たとえば、英国国教会の牧師であるウィリアムの兄は、初めてヴァージニアに向かう20歳の弟に対し、次のような忠告をする。

...“I know too well my duty to my father to remonstrate against any action of his, though in secret I may dread the consequence; but as I am your brother, and your elder, I may presume to give my opinion; may it not be prophetic! We have no right to invade the country of another, and I fear invaders will always meet a curse....for our God is just, and will weigh our actions in a just scale.” (37)

家父長制に従う彼は、父親には逆らわなかったけれども、弟には帝国主義的な所作に対して異を唱えている。ここで注意すべきは、彼が、父親や弟が参画しているのは「他者の国を侵略する」行為で、イングランド人にその権利はないと断言している点である。彼は、父親と弟を含むイングランド人植民者を「侵略者」と明確に定義し、「私たちの神」は「公平な秤で私たちの行為をはかる」から、「侵略者」には「呪い」が待ち受けているだろうと予言している。

とは言え、彼の言葉には効力も重みもない。彼の忠告によって弟がヴァージニア行きを思いとどまることはないし、彼自身、このような認識をもちながら、弟がヴァージニアで得た富で年300ポンドの牧師職を世話してもらい、4人の子どもたちに500ポンドずつ贈与してもらおう。その矛盾への葛藤が描かれることはない。ただ、彼の忠告の言葉は、読者に「ポカホントス神話」のほころびを垣間見せているとは言えるだろう。

さらに、この物語には、ネイティブ・アメリカン側の声も、正当な主張としてとり入れられている。ウンカの祖父にあたる族長は、突然やって来て、彼らから土地や食べ物を奪ったイングランド人に対し、以下のような非難の言葉を浴びせる。

“...We know you not, and have never offended you; why then have you taken possession of our lands, ate our fruits, and made our countrymen prisoners? Had you no lands of your own? Why did you not ask? We would have you given some....” (38)

しかし、「あなた方は自分の土地を持っていなかったのですか？なぜ頼まなかったのです？いくらか提供したのに」という族長のもっともな非難は、言葉の壁により、相手には伝わらない。けれども、この抗議の言葉もまた、イングランドの不当な振舞いを読者に印象づける効果を持っている。

このように、聞き入れられなかった忠告、伝わらなかった抗議としてではあれ、『フィーメール・アメリカン』には、対等の権威を持った複数のイデオロギー的立場が並存している。その意味で、この作品は「モノローグ的」ではなく、「ポリフォニー的」と言えるだろう。『ドストエフスキーの詩学』の中で、バフチンはドストエフスキーを「ポリフォニー小説の創造者」(16)と評価し、次のように述べている。

それぞれに独立して、互いに溶け合うことのないあまたの声と意識、それぞれがれっきとした価値を持つ声たちによる真のポリフォニーこそが、ドストエフスキーの小説の本質的な特徴なのである。彼の作品の中で起こっていることは、複数の個性や運命が単一の作者の意識の光に照らされた単一の客観的な世界の中で展開されてゆくといったことではない。そうではなくて、ここではまさに、それぞれの世界を持った複数の対等な意識が、各自の独自性を保ったまま、何らかの事件というまとまりの中に織り込まれてゆくのである。(15)

『フィーメール・アメリカン』が一人称で書かれた回想録でありながら、ひとつのイデオロギーに支配されたモノローグ的な作品になっていないのには、語り手であるウンカの異種混交性が深く関わっていると考えられる。敵対するイングランド人の父親とネイティブ・アメリカンの母親を持つ混血の娘ウンカは、父親と母親から受け継いだものを、どちらもほぼ捨て去ることなく享受する。そして、父親と母親から継承したものに優劣をつけることもしない。その態度が、この作品を多声的な空間にしている。

### 3. ヒロインの異種混交性

どちらかに肩入れして片方の声を消してしまうことなく、イングランドとアメリカ双方の声をとり込むウンカは、帰属の面では曖昧な立場であるにもかかわらず、不安や葛藤を感じることはない。むしろ、その曖昧さを豊かさという有利なものとして捉えている。それは、ウンカが自らの衣装を語る箇所にも顕著に表れている。

My tawny complexion, and the oddity of my dress, attracted every one's attention for my mother used to dress me in a kind of mixed habit, neither perfectly in the Indian, nor yet in the European taste, either of fine white linen, or a rich silk. I never wore a cap; but my lank black hair was adorned with diamonds and flowers....My arms were also adorned with strings of diamonds, and one of the same kind surrounded my waist. (49)

「上質の白いリネンや豪華なシルクで作られた、完全にインディアン風ともヨーロッパ風とも言えない折衷の服」を身にまとい、「豊かな黒髪」をダイヤモンドと花で飾り、両腕や腰周りにもダイヤモンドをあしらったウンカは、常に4人の奴隷を伴い、威風堂々としている。彼女は、イングランドで“princess” (49)と呼ばれ、近所のジェントリ階級の家庭すべてから招待される。「黄褐色の肌」

と美しく豪華な「折衷の服」に表れるウンカの他者性は、危険な嫌悪すべきものではなく、エキゾチックで魅惑的なものとして受け入れられるのである。彼女には「求愛者」「admirers”(50)も複数いる。とは言え、“...perhaps my fortune tempted them more than my person, at least I thought so, and accordingly diverted myself at their expense; for none touched my heart”(50)という一節が示すように、彼女を受け入れやすい存在にしているものは富であり、彼女はその富の力を(アイロニカルに)知っている。

ウンカの異種混交性はまた、彼女をイングランド的なジェンダー規範からもある程度自由にする。ボウエンは、イングランド人が多くのネイティヴ・アメリカンの文化に存在するジェンダー間の平等主義を危惧していた、と指摘している(189)。確かに『フィーメール・アメリカン』では、ウンカの両親は、6か月間同居した後、母親が父親にプロポーズしているし、ウンカの伯母は“...we are of opinion that nature has given us the same right to declare our love as it has to your sex....”(43)と、女性にも男性と同様に愛の告白をする権利があると言っている。そのような母親や伯母を持つウンカは、自ら愛を告白することこそないものの、求婚の場面では常に主導権を握っており、誰からも指図されることなくすべてを自分の意思で決めている。

教育の面においても、彼女は、伯父の教育方針で、いわゆる女性の「たしなみ」(accomplishments)を身につけるばかりでなく、当時は女性には相応しくないとされていたギリシャ語とラテン語の教育も受ける。さらに、“I frequently diverted myself with wearing a bow and arrow the queen my aunt left me, and I was so dexterous a shooter, that, when very young, I could shoot a bird on the wing”(49)とあるように、女王であるネイティヴ・アメリカンの伯母から受け継いだ弓と矢を見事に使いこなす。ここで注意したいのは、弓と矢が、母親ではなく、母親を殺害した伯母から遺されたものだという点である。ウンカは、母親を偲んで立派な記念碑を建てて一方で、伯母の形見の弓矢も大事にする、憤りや恨みとは不自然なまでに無縁な存在なのである。ファミリー・ヒストリーの血塗られた負の側面には拘泥せず、力となりうるものはすべてとり込むことによって可能になった存在がウンカと言える<sup>3</sup>。

#### 4. 権威とトリック

『フィーメール・アメリカン』の後半部分は、ウンカが、大西洋横断中に、息子との結婚を拒否された悪辣な船長から海に投げ出され、孤島でサバイバル生活を送りつつ、その島を年に一度訪れるネイティヴ・アメリカンを改宗させるというエピソードから成っている。『ロビンソン・クルーソー』と「伝道記録」を種本としているかのような主筋であるが、ここにもこれら2つの言説から逸脱する部分が散見される。そして、そのズレの部分には、いわゆる伝道物語でありながら、宗教の権威を疑わせるような要素が織り込まれているのである。

まずは、ウンカが孤島で女宣教師になっていく過程をたどっていこう。24歳の彼女は、最初はうちひしがれるが、すぐに気を取り直し、命あることを跪いて神に感謝する。そして、廃墟を見つけ、そこで40年間暮らした人物が遺した手記から、この島には危険な獣はいないこと、年に一度ネイティヴ・アメリカンが島を訪れることなど、さまざまな情報を得る。それをもとに無人島暮らしを始めた彼女を精神的に支えるのは、聖書と英国国教会の牧師の伯父から受けた教えである。

There was one circumstance attending my education, whilst under my uncle's tuition, that in justice to his memory, I ought not to omit, the religious part; and in this he was as methodical and exact as though I had been to be a divine; nor did he inculcate religion as a mere science; but in such a warmth and affecting manner, that whilst his lectures convinced the understanding, they converted the heart, and made me love and know religion at the same time. The happy effects of his pious instructions I have experienced throughout my life; and indeed in one part of it they were not only of the greatest comfort to me, but of the highest use, as will appear hereafter. (52)

ウンカは宗教によって心を慰められるが、最後の部分に書かれているように、彼女が受けた宗教教育は、ネイティヴ・アメリカンと出会った際に、きわめて「役に立つ」ものとなる。つまり、孤島でその日暮らしをするしかない状況を一変させるのである。

ある日、ウンカは巨大な像を見つける。裏側には「太陽のお告げ」とインディアン語で書かれている。像の中は空洞になっていて、眼や鼻や口や耳の穴からは島を見渡すことができる。驚いた彼女が思わず声をあげると、それは音響効果で驚くような大声となって響き渡る。この像が太陽のお告げを伝えるために使われていたと確信したウンカは、これを利用して、ネイティヴ・アメリカンを改宗させることを思いつく。

I had no sooner made my fixed determination to retire to this place, but a very strange thought arose in my mind. It was nothing less than this, to ascend into the hollow idol, speak to the Indians from thence, and endeavor to convert them from their idolatry. A bold attempt! Not rashly to be undertaken. I weighed this for several days in my mind...I further strengthened my resolution with this reflection, that an attempt to teach the knowledge of the true God to those who know him not, was laudable, and might not want a providential sanction. (83-4)

この箇所では、ウンカの意図はキリスト教を広めたいという純粋なもののように見えるが、その直後に、“I imagined hundreds of Indians prostrate before me with reverence and attention, whilst like a law-giver, I uttered precepts, and, like an orator, inculcated them with a voice magnified almost to the loudness of thunder” (86) と、ネイティヴ・アメリカンがトリックによって欺かれて一斉にひれ伏す様子を想像する場面があるために、彼女の動機は疑わしいものに思われてくる。さらに、ネイティヴ・アメリカンが彼女を神の遣いと信じ、従うようになると、“How greatly was my situation changed! From a solitary being, obliged to seek my own food from day to day, I was attended by a whole nation, all ready to serve me...” (118) と、権威を手に入れたこと自体を喜んでいる。彼女は、伝道という「偉大な仕事」(“the great work”)のためには、「権威」(“authority”)を確保しておくことが必要だから、自分の行為は許されると言う(119)。さらには、孤島で見つけた財宝を、何の罪の意識もなく、自分のものにしてしまう。

このように、ウンカの伝道には最初からいかがわしさが漂ってはいるものの、彼女の異種混交性

は、彼女をきわめて有能な女宣教師にする。彼女は、英語とインディアン語が理解できる利点を活かし、聖書と祈祷書を翻訳して、ネイティブ・アメリカンの司祭にそれを子どもたちや若者に教えさせる。

The use, I say, I made of the young priests was to teach the children, and young people, the Church of England's catechism: for as I had found a Common Prayer Book, among the few books that were in my chest, I translated the catechism into the Indian tongue, with a short and plain comment upon it; this I taught the priests to read, who afterwards made the children get it by heart. And as I had a Bible, I, at my leisure, translated that also, beginning with the plainest parts first, till I had finished the whole. (118-9)

イングランド人とネイティブ・アメリカン両方の文化に精通しているからこそ、ウンカには“As I was well acquainted with the manners of the Indians, I adapted my discourse to their own way of reasoning, and avoided all such terms, and modes of speech, as are intelligible only to Europeans” (107) というようなきめ細やかな作業ができるのである。

ウンカが用いるテキストが英国国教会の祈祷書と明示されていることから、彼女の伝道を英国国教会のSPG (the Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts) の活動と重ね合わせるのには自然なことのようと思われる。しかし、彼女が、最初に像の中から予言を行うのは、明らかにそれから逸脱する行為である。彼女は女性でありながら、以下のように、伯父の教えに従い、預言者としての訓練のようなものを積んでいる。

“We should,” continued he, “be often inculcating upon our minds the truths we know, and they will become fixed. We should often rebuke, advise, and console ourselves, and we shall become better man, more prudent, and more contented.” I was so strongly convinced of the reasonableness and utility of this practice that I adopted it. And according to his further advice, used to talk myself aloud, as the occasion required, as I would to another; and that with all the force of argument, vehemence, and energy of expression I could, or as the nature of the subject required....On these occasions, it was always my custom to imagine myself that my uncle was speaking to me; this I thought, as it were, inspired me, and gave an energy to my words, strength to my arguments, and commanded my attention. (69)

こうした場面から浮かび上がってくるのは、女性に予言や説教を認めていたクエーカー的な女宣教師の姿である。とは言え、それが完全にクエーカーと重なることはなく、ウンカは宗教的にも曖昧な存在となっている。

『フィーメール・アメリカン』は、よく知られた3つの物語を織り合わせながら、そのいずれからも脱線していくハイブリッドな作品である。作中では、帝国主義をめぐる複数の相反する立場の声が、どれも完全に肯定されることも否定されることもなく、並存している。人種、ジェンダー、

宗教という枠組みのいずれにおいても、優劣関係は成立せず、どこにも確固たる権威は付与されていない。「ポカホントス神話」や、『ロビンソン・クルーソー』、「伝道記録」の偏向性、別の表現を使うなら、それらのモノロゲ的な言説空間とは、著しい違いである。この作品をこのような多声的なテキストにしたのは、語り手であるウンカの異種混交性であると言えるだろう。異種混交性ははらむ不安や葛藤からは眼を逸らし、複数性を豊かさとしてのみ捉えることで成り立っているのが、『フィーメール・アメリカン』という作品なのである。

#### 註

1. 2001年に Broadview Press から出版された版を編集したバーナム (Burnham) によれば、『フィーメール・アメリカン』は、これら2つのアメリカ版以降、21世紀に入るまで再版はされていない。
2. 19世紀初頭から20世紀末まで看過されてきた『フィーメール・アメリカン』に批評家が注目するきっかけになったのは、2001年のブロードビュー版である。21世紀に入ってから、相次いでこの作品に関する論文が書かれている。なかでも、Kalata Vaccaro (2007-8)、Matthew Reilly (2011)、Scarlet Bowen (2012)、Chloe Wigston Smith (2017) らによる議論が示唆に富んでいる。
3. ウンカの父方の祖父も、母方の部族によって殺害されている (*The Female American* 37)。

#### 参考文献

- Armstrong, Nancy and Leonard Tennenhouse. *The Imaginary Puritan: Literature, Intellectual Labor, and the Origins of Personal Life*. U of California P, 1992.
- Blackwell, Jeannine. "An Island of Her Own: Heroines of the German Robinsonades from 1720 to 1800." *The German Quarterly*. 58 (1985): 5-26.
- Bowen, Scarlet. "Via Media: Transatlantic Anglicanism in *The Female American*." *The Eighteenth Century*. 53.2 (2012): 189-207.
- Colley, Linda. *Britons: Forging the Nation 1707-1837*. Yale UP, 1992.
- . *Captives: Britain, Empire, and the World: 1600-1850*. Random House, 2002.
- Gilmour, Michael J. "'Wipe the Dust off Your Feet': Glimpses of the Rejected Missionary in Literary Representations of Late Eighteenth-Century North America." *Transformation*. 25.4 (2008): 205-216.
- Hulme, Peter. *Colonial Encounters: Europe and the Native Caribbean 1492-1797*. Routledge, 1986.
- Jennings, Judith. *Gender, Religion, and Radicalism in the Long Eighteenth-Century: The 'Ingenious Quaker' and Her Connections*. Ashgate, 2006.
- Joseph, Betty. "(Re)playing Crusoe/Pocahontas: Circum-Atlantic Stagings in *The Female American*." *Criticism*. 42 (2000): 317-35.
- Kolodny, Annette. *The Land before Her: Fantasy and Experience of the American Frontiers 1630-1860*.



- U of North Carolina P, 1984.
- Larson, Rebecca. *Daughters of Light: Quaker Women Preaching and Prophesying in the Colonies and Abroad 1700-1775*. U of North Carolina P, 1999.
- Mills, Frederick V. "The Society in Scotland for Propagating Christian Knowledge in British North America, 1730-1775." *Church History*. 63 (1994): 15-30.
- Price, David. *Love and Hate in Jamestown: John Smith, Pocahontas, and the Start of a New Nation*. Vintage Books, 2005.
- Rasmussen, William M.S. *Pocahontas: Her Life and Legend*. Virginia Historical Society, 1994.
- Reilly, Matthew. "'No Eye Has Seen, or Ear Heard': Arabic Sources for Quaker Subjectivity in Unca Eliza Winkfield's *The Female American*." *Eighteenth-Century Studies*. 44.2 (2011): 261-83.
- Smith, Chloe Wigston. "The Empire of Home: Global Domestic Objects and *The Female American* (1767)." *Journal for Eighteenth-Century Studies*. 40.1 (2017): 67-87.
- Stevens, Laura M. *The Poor Indians: British Missionaries, Native Americans, and Colonial Sensibility*. U of Pennsylvania P, 2004.
- Strong, Rowan. "A Vision of an Anglican Imperialism: The Annual Sermons of the Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts 1701-1714." *Journal of Religious History*. 30.2 (2006): 175-198.
- Stymeist, David. "'Strange Wives': Pocahontas in Early Modern Colonial Advertisement." *Mosaic*. 35 (2002): 109-25.
- Vaccaro, Kalata. "'Recollection...Sets My Busy Imagination to Work': Transatlantic Self-Narration, Performance, and Reception in *The Female American*." *Eighteenth-Century Fiction*. 20 (2007-8): 127-50.
- Walsh, John, et al, eds. *The Church of England c.1689-1833: From Toleration to Tractarianism*. Cambridge UP, 1993.
- Winkfield, Unca Eliza. *The Female American*. Edited by Michelle Burnham, Broadview P, 2001.
- 岩尾龍太郎『ロビンソン変形譚小史』みすず書房、2000年。
- 富山太佳夫「黒い思想家——『権利の章典』とポストコロニアリズム」『岩波講座 文学別巻：文学理論』岩波書店、2004年、279-309。
- ミハイル・バフチン『ドストエフスキーの詩学』望月哲男・鈴木淳一訳、筑摩書房、1995年。
- フランツ・ファノン『黒い皮膚・白い仮面』海老坂武・加藤晴久訳、みすず書房、1998年。

\* 本稿は、2005年8月に青山学院大学で開催されたテキスト研究学会第5回大会における研究発表の原稿に大幅な加筆・修正を施したものである。